

第74回日本皮膚科学会 中部支部学術大会を開催して

(2023年10月28・29日)

※国立京都国際会館とWeb配信のハイブリッド開催

森 脇 真 一

大阪医科薬科大学医学部皮膚科学教室教授

はじめに

第74回日本皮膚科学会中部支部学術大会を、「やくそく～Wings for the future～」をテーマに2023年10月28・29日の両日、国立京都国際会館にて開催させていただきました(図1)。本学での本大会の主催は1960年の第11回大会(栗原善夫教授)、1979年の第30回大会(安原 稔教授)、2003年の第54回大会(清金公裕教授)に次いで4回目、20年ぶりになります。

今回はハイブリッド開催といたしましたが、1,547名の参加者にご出席いただき、その中で1,047名の先生方には紅葉が色づき秋深まる京都の会場に直接ご来場いただきました。キャリアアップのために多くの知識をアップデートしていただき、診療、研究いずれであっても、これからも皮膚科医人生が続く先生方の将来において、改めて「患者さんのための皮膚科医で居続けるんだ」という約束(未来に向けての“やくそく”)をしていただけたのではないかと考えております。

4年ぶりとなった会員懇親の場

学術大会の5カ月前、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類に移行し、コロナ禍も改善傾向にありましたので、学術大会の前日には私の恩師、今村貞夫先生(京都大学名誉教授)を含む約100名の先生方に現地(ザ・プリンス京都宝ヶ池)に集っていただき、会長招宴会を盛大に開催することができました。大会1日目終了後の夜には国立京都国際会館のメインロビー、庭園にてカクテルパーティーも開催でき、多くの先生方にご参加いただき、中部支部では4年ぶりに会員懇親の場をもつことができました。

プログラムについて

今回、特別講演として皮膚科医であられる松本吉郎日本医師会会長に「最近の医療情勢—医師の働き方改革、感染症対策等について—」と題して、医師



図1 学術大会ポスター

会活動の現状、将来と皮膚科医へのメッセージを、名古屋大学環境医学研究所教授の荻 朋男先生には私も専門にしております紫外線性DNA損傷修復について「DNA 修復機構の異常により発症する光線過敏を伴う遺伝性皮膚疾患の分子病態」というタイトルで最先端の研究成果をご紹介いただきました。

招 聘 講 演 では 米 国Brigham and Women's Hospital皮膚科教授で米国女性皮膚科医のリーダーの一人であるChrysalyne D. Schmults先生に「Desmoplasia induces T-cell exhaustion in cutaneous squamous cell carcinoma」と題してdesmoplasiaという観点からみた皮膚癌進展の分子機構についてお話しいただきました。Schmults教授は今回が初めての来日で、ご主人と学会前に東京、学会中は京都、そして学会翌日からは奈良での観光を楽しまれ、日本での滞在を満喫されて、お元気に米国に帰国されました。

そのほかのプログラムとして、皮膚科難病治療をテーマにした「遺伝性の皮膚難病治療に挑む」、「皮膚がん治療最前線」、女性皮膚科医を演者とした

「Women in Science in Dermatology」、「トータルアレルギー診療における皮膚アレルギー診療のポジショニング」という4つのシンポジウム、6つの教育講演(皮膚病理、皮膚外科、皮膚科超音波検査、フットケア、医療倫理、研究指針)、30の共催セミナー、そして129本の一般演題を賜り、どの会場でも活発なディスカッションが行われていました。

おわりに

今回、私自身は日本皮膚科学会中部支部の支部長(最終年度の4年目)も担当しており、役員会、支部総会のマネジメント、さらに中部支部の代議員選挙も迫っておりかなり多忙な3日間でしたが、中部支部の先生方、全国の先生方、日本皮膚科学会の大会運営部チームスタッフ、そして多くの企業から多大なるご支援をいただき、天候にも恵まれ、学術大会を成会裏に終えることができました(図2)。大阪医科薬科大学皮膚科学教室を代表して、この場をお借りして御礼申し上げます。



図2 学会全日程終了後の医局員集合写真